



おしえの花束

# 雲晴

新年号

「雲晴」第二十五号

平成三十年一月一日発行

貞林院瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六一番五  
電話(〇三)三六二七―三四一五  
FAX(〇三)五六九九―五九一五



謹んで新春の

お慶びを申し上げます

今年の干支は戌年、つちのえいぬ戌戌なので、昭和三十三年生まれの人は還暦を迎える年となります。還暦とは本卦ほんけがえりとも言い、生まれた年の干支に戻ることから、生まれ直すという意味もあります。このことから再び赤ん坊に還るといふことで、お祝いとして赤い頭巾やちゃんちゃんこ、座布団などを贈る風習ができたようです。

六十年前の昭和三十三年とはどんな時代だったのでしょうか。終戦から十三年を経て、世の中は高度経済成長を背景に「岩戸景気」で沸いていたようです。東京タワーが完成したのもこの年であり、正に日本の好景気を象徴するものだったのでしょうか。また天皇皇后両陛下がご婚

約を発表されたのもこの年で、おめでたムードに包まれた昭和の良き時代だったのかもしれない。さて今年には平成三十年、新しい元号が制定されて早や三十年という月日が経ちました。

「平成」という元号は中国の「史記」や「書経」にある「内(地)平かに外成る」より付けられたもので「国の内外、天地とも平和が達成される」という意味だそうです。新しい元号を制定するにあたり、当時の思いとしては「これからの時代、日本だけでなく世界中が平安でありますように」という願いが込められたものだったのでしよう。

さてこの三十年間を振り返ってみますと、果たしてこの願いは通じたのでしょうか。国内で言えば阪神淡路、東日本、熊本大震災、台風や集中豪雨、火山の噴火などこれまで多くの大規模な自然災害がありました。また凶悪な犯罪や殺人事件は連日のようにニュースになっていきます。そして海外ではテロ事件をはじめ各地での戦争や紛争は未だに治まる気配がありません。天災は防ぎようもないところもあるかもしれませんが、争いは人間の知恵と努力で何とかかなるものだと思います。

新しい年を迎えどうか今年一年、世の中が元号のとおり「平かに成る」ことを念じます。

## ● 子に想う ● 宗慶寺住職 本 多 宗 敬

私事ですが、昨年十月に第一子となる娘が誕生致しました。産まれたばかりの我が子と接していると、色々なことを教えられます。

例えば赤子はお腹が空いたり、寒かったり、何か伝えたいことがあると泣きます。そんな我が子が泣き叫ぶ姿を見て、ふっと思いついた言葉があります。江戸時代の碩嚴上人という方の言葉に、「譬へば、赤子の母を恋して鳴き別念を有すること無きが如し」とい

う言葉があります。この言葉は、お念仏をお称えする我々の姿を赤子の泣く姿に譬えた言葉です。赤子は泣けば助けてもらえるかどうか考えずに、時には何が辛いのかも分からずに、ただひたすらに泣き叫びます。阿弥陀様からすれば、お念仏をお称えする我々は何も分かっている赤子の様な存在であると教えてくれる言葉です。

かし、我が子を胸に抱く今、この言葉の意味をより一層深く考えるようになりました。私自身、日々お念仏をお称えしながらも、ついつい雑念が入ってしまうことがあります。泣き叫ぶ我が子は、そんな私に「何も考えずに、ただひたすらに阿弥陀様におすがりすればいいのだよ。」と教えてくれているようです。

感謝の日暮らし  
われわれはお天気により気分が変わります。朝、晴れていると気持ちよく起きることが出来ますが、雨が降っていると何か一日重たい気分になります。



## 一口法話

それがわれわれ凡人の心であります。「生かされて 生きるや今日のこの命 天地(あめつち)の恩 限りなき恩」と申します。私たちが今生きているということは、天から恵みの雨が降り、光が差し、大地の養分をいただいてお米や野菜が育ち、それを私たちが頂戴して、この命を生かさせていただいているということです。でございます。

この真実をしつかり受け止めることが出来ましたら、常に感謝の心をもって、雨の日もよし、天気の日もよし、みな有難いと、そのように受け取ることができると思うのであります。

家を建てることを「普請」と申し

## 民話の小箱 (宮城県)

## みちびき地蔵 ● 守る

むかしむかし、気仙沼の大島の話。端午の節句を翌日に迎えた日のこと。大島に住む浜吉とゆう男の子とその母が、隣の村まで田植えの手伝いに出かけました。夕方、手伝いを終えた母子は、家に向かって歩いてくると歩き、地蔵さんの前までやって来ました。この地蔵さんは、村の人から「みちびき地蔵」と呼ばれていま

翌日亡くなる人の霊が地蔵さんに参りに来て、霊をあの人に導いてくれる。「みちびき地蔵」だと。母子はお地蔵さんに手を合わせました。すると何だか不思議な気持ちになるのです。ここには浜吉と母しかいないはずなのに、他にも人がいるような気が強くなるのです。気のせいではありません。ふと見上げてみると、そこには村のお婆さ

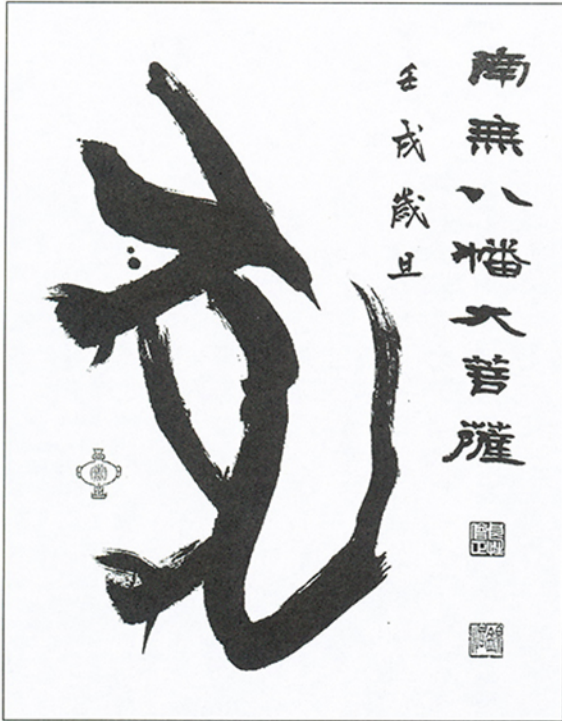


ん達がいました。それに若い母親と赤ん坊の姿も、たくましい男もいました。それどころか牛や馬もいたのです。母は「みちびき地蔵」の言い伝えを思い浮かべました。「ああ、みんな明日亡くなるだけか。それにしてもこんなにたくさん人が……?」だんだん恐ろしくなってきた母、浜吉の手を引いて、一目散に駆け出しました。

息を切らせて母は父に言いました。しかし父は、「そんなばかな。狐にでも化かされたんじやろう」と笑うだけ。

夜が明け端午の節句になりました。

誘いの書へ



その日は潮が普段より遠くまでかなり引いていたので、村の人たちがたくさん浜辺に出て、打ち上げられた海藻を拾っていました。

みんなが浜に集まっていると聞いた浜吉も、浜に行きたいとせがみます。母はニコリと頷いて浜吉の手を引いて浜に向かいました。

「生まれてこのかた、こんなに潮が引いたのは見たことがない」村の年寄り達がこんな話をしている横で母と浜吉もセッセと海藻を拾いました。

しばらくして突然、叫び声がありました。「津波じゃ！」その大きな盛り上がった波がどんどん浜へ近づいてきていました。



「津波じゃ！飲み込まれるぞ山へ逃げろ！」

突然のことで、オロオロ。母は浜吉をおぶって、無我夢中で走りました。そして二人がなんとか裏の山に登りきったところで、津波が浜と村を全部飲み込んでしまいました。

浜吉親子たちはなんとか助かりましたが、助からず津波と一緒に消えてしまった人もおおぜいいました。

「昨日見たのは狐に化かされたんじやない。言い伝えは本当だったんじや…」この津波で亡くなる人やら牛やらが、昨日地藏さんに参ってたんじや…」

合掌

### 「犬」

貞林院瑞正寺 住職 林 清方  
故林 錦洞書

今年<sup>いぬとし</sup>は戌歳。金文（中国殷・周代の文字で象形文字的なものが多く見られます）で書かれた「犬」です。「南無八幡大菩薩」次に「壬戌歳旦」とあることから戌年であった先代錦洞が昭和五十七年、自分の還暦を迎えるにあたり正月用にと揮毫したものであると思われまます。

ます。「普請」とは「普請衆力」、あまねくもろもろの力を願う」ということであります。家の普請では、さも自分一人で建てたように思いがちですが、確かに自身の財布からお金は出ますが、自分の甲斐性だけでは家は建ちません。大工さん、左官屋さんなど工事に関するすべての方々のお力をいただき、家は完成するのです。

すべて仏さまのお計らいにより「生かされている」私たちは、その喜びに感謝し仏さまに手を合わせ、お念仏を称える中に生活していきたいものであります。「世の中は俺が俺のガを捨てて お蔭お蔭のゲに生きる」

総本山知恩院布教師会ホームページより

八幡大菩薩の本地は阿弥陀来であり、戌亥歳の守り本尊でもあります。鎌倉の鶴岡八幡宮なども戌亥歳の守り神として有名です。中国の故事に「犬馬の勞」ということわざがあります。犬や馬は主人に忠実でよく働きよく尽くすということから、自分を謙遜した意味で使われます。

今年は何事にも裏表なく常に全力で物事にあたり、そして素直な気持ちで人に尽くすと言う心掛けをもって一年を精進しましょう。

## 謹賀新年

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。

今年も心を新たに精進いたしますので、檀信徒の皆様におかれましては、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

戌年の守り本尊は、阿弥陀如来です。無量の慈悲と無量の智慧をもって私たちをお守り下さり、全ての人々を西方浄土に救おうとされています。

今年一年檀信徒ご一同さまの平安を心より祈念申し上げます。

平成三十年 戊戌 元旦

## 貞林院 瑞正寺

住職 林 清方

副住職 林 良政

法類総代 林 英道

同寺総代世話人 一同

迎



春

## 平成三十年

## 年中行事のお知らせ

本年の行事につきましては、下記のとおり予定しております。近づきましたらあらためてご案内いたしますので、お誘い合わせの上ご参詣ください。

\*春・秋彼岸会法要につきましては、あらためてご案内をしておりますが、お中日に塔婆回向をしておりますので、

ご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。

\*春彼岸会法要 三月二日(水)

施餓鬼会法要 五月十四日(月)

七月お盆法要 七月十五日(日)

八月お盆法要 八月十三日(月)

\*秋彼岸会法要 九月二三日(日)

## 住職の母林暎子の思い出

昨年の八月十七日に母が九十四歳の生涯を終え、お浄土に往生いたしました。通夜・葬儀は同月二十五日、二十六日と執り行い、檀信徒をはじめ大勢の方々にご会葬頂きあらためて御礼申し上げます。両日とも三十六度を超える大変な猛暑でしたので、これもいい思い出となりそうです。

母の戒名は瑞香院貞譽暎壽暎芳大姉と生前より先代錦洞から授けられておりました。院号の「瑞香」は母の書道と華道の雅号であり、貞淑な妻として寺を支え輝く天寿を全うし、芳しい人生であったという意味です。

母は大正十二年一月二十九日生まれで関東大震災が起きた年でした。地震の時に祖母が母をおんぶして避難したという話を聞かされたことがあります。



還暦で孫(現副住職良政2歳の時)と一緒に

現在の寺(旧瑞正寺)に一人娘として生れ、父親の林祖洞には大変厳しく育てられたようです。そんな経験から

か私と姉、兄三人の子どもたちにはとても優しく、自分の事よりもとにかく子どもたちのことを考えてくれていました。



母の喜寿誕生日に先代と二人でお祝いです

母は外出するよりは家にいる事が多く、その方が好きだったように思っていました。今思えば寺は留守ができませんので、自分が留守番をして家族が好きに出られるようにしてくれていたのだと思います。晩年は家族に何かしてもらおうと何でも「ありがとう」と言っただけの手を合わせていました。その姿はまるで仏さんのようでもあり、こうして歳を重ねていきたいとも思いました。今頃は先代と八年振りに再会して仲良くしていることでしょう。合掌